

水 振 協 ニ ュ ー ス

平成 22 年度号

編集・発行 (財) 滋賀県水産振興協会 (tel 077-568-3451)

草津市志那町 1393-2

平成 22 年は 4 月が寒く、ニゴロブナ、ホンモロコとも採卵が遅れぎみになりました。夏の猛暑で、ニゴロブナのエサ喰いが悪くなり、栽培漁業センターでの生産は目標を 10 万尾ほど下回りましたが、その他はほぼ順調に推移し、目標を達成することができました。各漁業組合、水産試験場には養成、放流、標識調査にご協力いただき、ありがとうございました。放流尾数は下の表のとおりです。

区分		尾数
ニゴロブナ	2cm 稚魚	983 万尾
	17g 稚魚	95 万尾
ホンモロコ	ふ化仔魚	1.2 億尾
	1～2cm 稚魚	411 万尾
アユ	流下仔魚	19 億尾
ワタカ	5cm 稚魚	43 万尾

ニゴロブナ

2cm 稚魚は水田放流が 842 万尾、栽培漁業センター、山田地先筏の生産が 141 万尾でした。体重 17g の大型稚魚 67 万尾を栽培漁業センター、14 万尾を山田地先筏で生産し、滋賀県漁連から体重 22.3g の大型稚魚 14 万尾を購入し、放流しました。この他に、滋賀県漁連では大型稚魚 30 万尾を放流しています。

水田育成 主に沿湖漁業組合のご協力により実施し、15 漁協、514 反の水田にふ化仔魚を放流し、2～3cm 稚魚 841 万尾が琵琶湖に流下しました。水田からの稚魚の流下率（流下尾数 / 放養尾数）は 42%でした。

放流効果 平成 23 年の冬、小糸、沖曳で漁獲されたニゴロブナを調査しています。今年の冬季の混獲率は調査中ですが、平成 22 年 2～3 月の混獲率（漁獲魚に占める放流魚の割合）は 74%でした。平成 20 年、21 年の冬のように 8 割を越えませんでした。放流は大きな効果があることがわかっています。主に、沖合いに放流した大型稚魚、水田放流の稚魚が多く獲られていました。

ただ、天然資源の少ない状況は続いています。昔、卵や稚魚が多く見られた近江八幡市牧地先、長浜市海老江地先、高島市新旭町地先などのヨシ帯を見て回りましたが、卵や稚魚はあまり見えませんでした。

一方、春から夏の産卵期に岸で漁獲されるニゴロブナの標識では、混獲率は天然魚が約5割(去年は7割)、放流魚は約5割(去年は3割)でした。

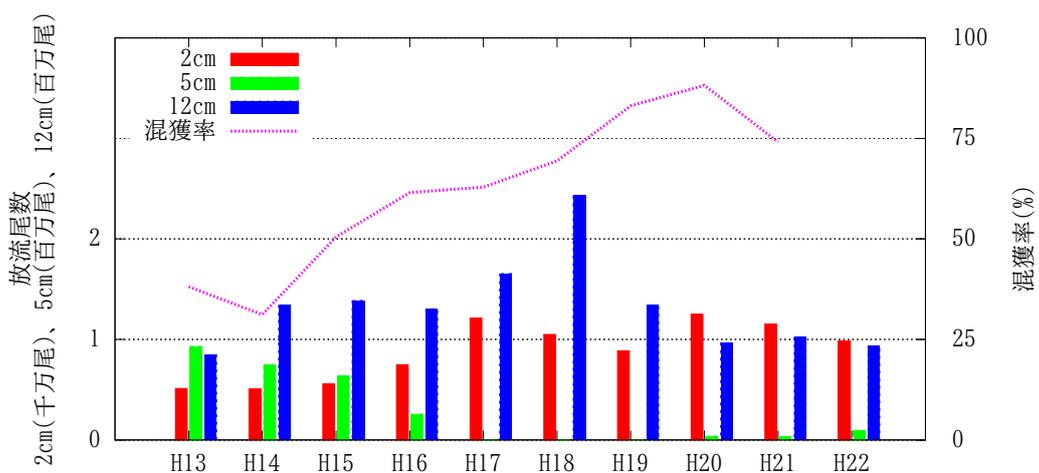
放流魚の全てが夏季に岸に少ないのではなく、岸に放流した大型稚魚、ヨシに放流した2cmサイズの稚魚は岸でも多く獲られていましたが、沖合いに放流した大型稚魚、水田放流の稚魚は、放流尾数に比べると多くありませんでした。特に、沖合いに放流した大型稚魚は少ない結果になりました。また、水田放流の稚魚は水田に通じる水路に多くいました。



ニゴロブナ卵の水田放流



ニゴロブナ大型稚魚の放流



ニゴロブナの放流尾数と混獲率

ホンモロコ

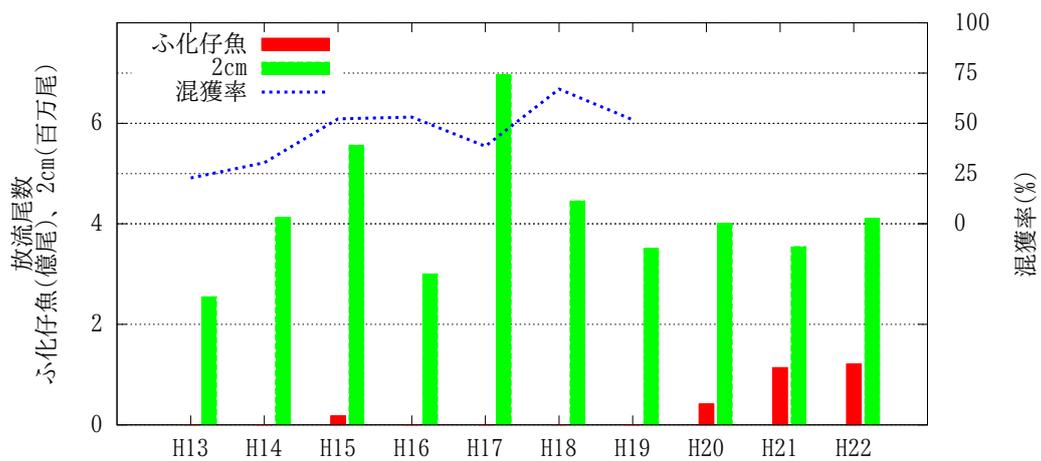
平成 20 年からふ化仔魚の放流を始めてます。栽培漁業センター、山田地先筏の親魚から採卵し、近江八幡市佐波江地先、大津市小野地先に卵を輸送、網に入れ、ふ化まで保護し、ふ化仔魚数で 1 億 21 百万尾を放流しました。下の写真の青色の網の中に卵が入っています。また、草津市北山田地先筏で 1~2cm 稚魚 411 万尾を生産し、放流しました。



ホンモロコ卵の放流



ホンモロコ 2cm 稚魚の放流



ホンモロコの放流尾数と混獲率

アユ

安曇川人工河川、姉川人工河川から、アユ仔魚を放流しました。琵琶湖への流下仔魚数は19億尾でした。



アユ人工河川への放流



人工河川を泳ぐアユ

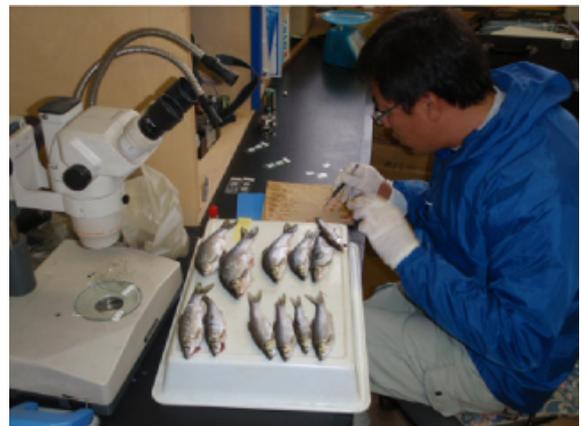
ワタカ

栽培漁業センターでワタカ 5cm 稚魚 43万尾を生産し、南湖に放流しました。

南湖を中心に標識調査を行いました。その結果、琵琶湖のワタカのうち放流魚は97%を占めているとわかりました。



ワタカ稚魚の放流



ワタカの標識調査

(財)滋賀県水産振興協会では、漁獲量のアンケート調査を、平成23年4月から始めます。大事な調査ですので、ご協力よろしく申し上げます。